慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（33353）1211（大代表）

完全ハイブリッド型連合三田会2022大会開催！

～新時代の幕開け～

＼つながろう、いま。つなげよう、未来。／　連合三田会2022

10月16日日曜日、3年ぶりのリアル連合三田会大会当日は、奇跡的に雲間から朝日が日吉のグランドを照らすスタートとなりました。朝の塾旗掲揚では、医学部OG菅沼安嬉子連合三田会会長のご挨拶を皮切りに、一大イベントの日を迎えた高揚感に胸が高鳴りました。

新型コロナの流行でリアル開催が見送られたこの3年間。連合三田会大会そのもののあり方が問われました。私たちはどんな大会を望んでいるのか、3年前のリアル大会を取り戻したい、しかしそれだけでいいのか、学部や学年の枠を超えて多様なメンバーがオンラインで毎月議論を繰り返し、その末にできあがったのが「完全ハイブリッド型連合三田会大会」（大会のスローガン「つながろう、いま。つなげよう、未来。」）です。医学部・看護短大卒のメンバーは、主に1992年卒（医学部71回生）が救護部会を担当し、1994年卒（医学部73回生、大会の当番学年と同期入学）が医学部三四会主催のイベントを担当しました。

救護部会は、和田則仁君（71回）が中心となり、71回生、81回生、91回生と看護短大1992年卒（2回生）の計48名が日吉キャンパス内の3か所の救護所と、検温所、記念館の計5か所で活動しました。幸い、検温所での発熱者はなく、救護所での数名の擦過傷と飲酒者対応のみで総じて落ち着いていました。救護部会の活動では例年通り保健管理センターにご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

講演後の対談

三四会講演会に登壇した向井千秋君と宮田裕章君

イベント部会における医学部三四会主催のイベントは、73回生が中心となり、74回生、83回生、93回生、看護短大94年卒に加えて92年卒、クリニカル・シミュレーションラボ、KAPPA所属医学部生、医学部3年生（105回生）、救急医学教室と外科学教室、看護部、さらには企業6社のご協力を得て、総勢100名以上が集まり開催にいたりました。空間的距離を超えた「つながり」と次世代へ向けた「つながり」を意識した3本立てのイベント、三四会講演会「つながる医学～データサイエンスから宇宙まで～」、キッズ向け医療体験型イベント「ドクターに挑戦！」、オンライン座談会「世界で活躍する73回生とつながろう、いま」（事前収録）を企画しました。コアメンバー（福永興壱君、後藤英樹君、持田ガネシュワラン仁司君、川久保博文君、片山正輝君、近藤健介君、浦上秀次郎君、内田敬子（以上73回）、のちに藤田由里子君（73回）、佐藤幸男君（83回）が参入）が2021年11月には決定し、持ち前のチームワークで12月には企画の骨子が固まりました。また、「ドクターに挑戦！」の予約サイトや独自のオンラインツール「デジミタ」やツイッターやインスタを用いた広報など、ここ数年で進んだオンラインシステムが大会準備の効率化につながりました。そのような中で迎えた10月16日当日は、予想以上に多くの方にご来場いただきました。

三四会講演会では、開場前に入り口で行列ができるほどの盛況ぶりで、オンラインも180視聴にのぼりました。一人目の演者、医学部医療政策・管理学教室教授宮田裕章君は、「つながり」をデータサイエンスの立場から紐解き、今まさに時代の転換点であり、持続可能な未来と一人一人の豊かさの調和が求められ、その中でデジタルによるつながりの可能性を多方面からご解説いただきました。二人目は本学出身の宇宙飛行士向井千秋君（外56回）に、なぜ外科医から宇宙飛行士へ転換したか、ご自身のご経験をエポックメイキングな時代背景と合わせてご紹介いただき、宇宙と医学のつながりを明快にお話いただきました。最後の対談では、若者に向けたメッセージとして、学びのスタイルが変化する中でつながりや夢を持つことの大切さを伝えていただきました。

「ドクターに挑戦！」には、新型コロナの流行にもかかわらず多数の企業のご協力を得て、外科手術体験、胃内視鏡体験、心肺蘇生・AED体験、血圧測定体験、脳血管内治療体験に加えて、新規企画として、3D眼科手術体験、PCR体験がそろいました。当日は、のべ171名のキッズドクターが本物の医療機器を使った様々な医療体験に挑みました。眼を輝かせて挑戦する子どもたちの姿に逆に私たちが深い感動をもらいました。なお、講演会を含む一部のイベントは当日参加が叶わなかった方にも少なくとも年内までアーカイブ配信をお楽しみいただけます。

「ドクターに挑戦！」での子どもたち
本人・保護者の許可を得て掲載（右下画像提供：広報室）

メンバー一丸となって実現

大会全体では、日吉来場者とオンラインを合わせて、参加者が1万7000人にものぼりました。人間交際、社中協力を強く実感する大会となりました。大会を通じて、医学部卒の同輩はもちろんのこと、他学部出身者とともに準備に明け暮れ当日を乗り切り、大会後はお互いに労いの言葉を掛け合う仲間となりました。連合三田会2022大会はアーカイブ配信を経て終了となりますが、「つながり」は未来に向かって続きます。来年の連合三田会大会への応援もどうぞよろしくお願い申し上げます。

（イベント部会医学部三四会イベント担当　内田敬子　73回）

令和4年度 三四会全国支部長会開催

新型コロナウイルス蔓延のため、3年ぶりとなった全国支部長会は、9月24日（土）17時半から帝国ホテル本館3階、雅の間で開催された。本年3月に支部長を対象に参加に関するアンケート調査を行った結果、現地参加とWEB参加の希望はほぼ半々であった。今回は、支部長会としては初めてのハイブリッド開催となったが、オミクロン株の収束が見られず、さらに当日、台風15号が熱帯低気圧になり関東を通過する中で、全国から計27名（現地参加13名、WEB参加14名）の支部長の参加を得て開催することが出来た。悪天候の中、現地参加予定の支部長は遠方の広島、富山、東海の支部長をはじめ計13名全員に参加していただいた。また、WEB参加が実現したことで福村大（68回）ボストン支部長はじめ、宮崎、島根、高知、福井、宮城など計14の支部長に参加していただけたことも三四会支部長会にとって大きな収穫であった。また、今回はご多忙の中、菅沼安嬉子連合三田会会長（47回）にもご参加いただいた。

今回のテーマは、昨年9月に1年遅れで三四会100年記念式典（慶應義塾大学病院、三四会、慶應医学会の合同記念式典・シンポジウム）をWEB開催したことと慶應義塾大学病院1号館が本年5月にグランドオープンしたことを受けて「三四会100年記念行事の終了報告と慶應義塾大学病院グランドオープン特集」とした。司会は支部担当理事の堀内行雄（52回）が務めた。

今回は、ホテル側の感染症対策に加えて、塾歌の斉唱せずに拝聴し、気持ちを引き締めて会に臨んだ。冒頭に司会から今回はWEB開催でもあり乾杯を行わないこと、現地参加者に対してはランチョン形式で会を行うが感染には十分注意すること、WEB参加者は飲食しながら参加していただくように説明した。

まず、武田純三三四会会長（52回）からは、三四会の現状、多岐にわたる三四会活動の詳細な報告、昨年9月に一年遅れの三四会100年合同記念式典開催の報告、新棟の募金活動の御礼、支部長の日頃の協力に対する感謝、地域三田会と三四会支部の連携の重要性をわかりやすく説明され、他大学卒業後に慶應義塾大学医学部の教室に入られた方々の三四会への勧誘の重要性について話された。最後に三四会百年記念の動画も上映された。

次いで、菅沼安嬉子連合三田会会長は、社中の連携の大切さ、連合三田会への参加や地域三田会との交流の重要性を強調された。また、菅沼先生の発案で第一回の三四会全国支部長会が平成16年10月に明治記念館で開催されたときの経緯について説明された。

金井隆典医学部長（67回）は、医学部長としていろいろな課題に取り組まれていること、菅沼会長の話の後を受け三田会との交流の重要性にも触れ、三四会支部の発展と地域三田会との更なる交流の重要性について話された。

続いて、松本守雄病院長（65回）から、昨年9月に1年遅れの慶應義塾大学病院100年合同記念式典の報告と大学病院の歴史について動画を用いて説明された後、慶應義塾大学病院エントランスと外構が計画から10年越しで完成し本年5月にグランドオープンしたことと慶應義塾大学病院は、高度急性期医療、様々な領域の医療の提供、がんゲノム医療やAホスピタル事業などの先進的医療などの様々な機能を担っていることも動画を交えて説明された。また、2023年に森ビルと提携して虎ノ門・麻布台地区に慶應義塾大学予防医療センターが拡張移転することについても説明された。

ここで、司会者から昨年10月医学部新聞に掲載された医学部、病院、医学研究科の新執行部メンバーの紹介を顔写真で示しながら行った。

次いで、宮川義隆理事（70回）から導入することが決まった新しい三四会情報管理システムについてわかりやすい紹介があった。会員名簿、医学部新聞、ホームページ、評議員会、支部会（会長、副会長が各地を訪問）などに役立つ管理システムでいろいろな点で今後の三四会の発展に大いに役立つものと期待され、支部長のご理解ご協力をお願いした。

この後、山上淳理事（77回）に司会を交代し、参加していただいた支部長全員に学年の上から順番に一人2分の制限時間で三四会支部の近況を含めたご意見やご要望をいただいた。話の中で各支部長もコロナ禍で、いろいろと苦労されていることが伝わってきた。今回は、久しぶりに顔の見える対面を含めたハイブリッド開催が出来たので会は予想以上に盛り上がった。

最後に、恒例の如く肩を組んでの「若き血」の斉唱は出来ないので、「若き血」のエール（2020年連合三田会作成）という動画を拝聴した後に、古梶清和副会長（63回）の閉会の辞で会を締めくくり、散会となった。

（堀内行雄　幣52回）

感染症専門家の育成機関として 臨床感染症センター発足

2022年10月1日付けで、慶應義塾大学病院の臨床施設部門に、長谷川直樹教授（64回）をセンター長として、臨床感染症センターが発足致しましたので、三四会会員の皆様にご報告いたします。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックを皮切りに、感染症診療や感染制御、および感染症危機管理を担える感染症専門家の育成は我が国の急務となっております。一方、日本感染症学会が認定した感染症専門医は、2022年9月1日現在1689名ですが、学会が試算した国内の病院に必要な感染症専門医の適正数は3000～4000人とされ、大幅に不足しています。

臨床感染症センターは医学部感染症学教室の教員が構成員となり、その主要なミッションは感染制御部と連携した感染症コンサルテーション、外来診療、および感染症に関わる人材育成です。様々な感染症において、感染症専門医の診療支援が在院日数や集中治療室滞在期間の短縮、患者の予後の改善にも寄与することが示されています。今後は、各診療科における難治性疾患や臓器移植、再生医療等に伴う感染症の診断、治療や予防への支援を進め、診療の質の向上や、治験、臨床研究の成績向上に貢献して参ります。

外来診療では、従来の感染症外来を臨床感染症センターが担当いたします。当院は東京都のエイズ中核拠点病院に指定されており、HIV感染症や抗酸菌感染症等の難治性全身感染症の診療を行うとともに、海外渡航前、臓器移植前後、脾臓摘出後など様々な状況に応じた予防接種外来もさらに推進して参ります（我が国で承認済みワクチンのみ使用可能です）。

人材育成では、臓器横断的診療能力、臨床微生物学、薬物動態学、感染症倫理、新興・再興感染症対策、感染症危機管理の6点をコアコンピテンシーとした、国際的にも通用する感染症専門医の育成を目指します。また、医療系学部・学科の学生、教員や病院職員に対する感染症についての教育を通して、感染症に関する知識と技能を備えた医療人の育成に努めます。さらに、感染症関連の臨床研究、トランスレーショナル研究なども推進し慶應義塾の益々の発展に貢献して参る所存です。

今後とも三四会会員の皆様のご支援、ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

（感染症学　宇野俊介　87回）

長谷川直樹センター長

「よろしくお願いいたします」
臨床感染症センター外来担当一同

三四会 令和４年度第３回定例理事会報告

1．三四会員の日本医師会、都道府県・市町村の医師会役員名簿を作成
2．慶應義塾より依頼のウクライナ避難留学生への学費、生活費・渡航費等として金50万円を支援
3．研究発表動画２編をホームページでの公表を開始
4．会員情報管理システムの更新

会員管理・名簿作成システムが老朽化して、いつ破綻するか分からない状況にあり、早急な更新が迫られていた。１年ほどの検討を行い、会員管理と名簿作成が一社でできるため個人情報の管理・取扱いが容易なことと、今後の三四会活動の発展に寄与できるとの理由で、時事通信社に委託することにした。今後このシステムを利用して三四会のICT強化を図る予定である。その一環として、研究成果の動画配信を開始することになった。今回は呼吸器外科浅村教授（Lancet）、皮膚科高橋勇人准教授（Immunology）の二人にお願いした。

第102回 慶應医学会総会・シンポジウム

日時　2022年11月19日（土）13時30分～18時00分
場所　WEB開催（メイン会場：慶應義塾大学 総合医科学研究棟１階ラウンジ）
主催　慶應医学会
共催　慶應義塾大学医学部

シンポジウム　『先端技術から紐解くこころ』

「こころ」は長い間人々を魅了するとともに、神秘的なブラックボックスでもありました。近年では、そのようなこころの働きに対して人工知能（AI）や画像診断をはじめ、さまざまな神経科学的アプローチが多くのイノベーションを創出しています。このように先端技術を用いてこころの働きに光を当て、さらにそれを高めていく研究領域は、ポストコロナ、ウィズコロナ時代にますますその重要性が高まっています。

今回第102回の慶應医学会シンポジウムでは、最近の先端技術により、こころの働きの解明に取り組むトップリーダーの方々をお招きし、WEB開催（Live配信）シンポジウムを行うことといたしました。まず、ご登壇いただくのはアンドロイド、ヒューマノイド研究の第一人者である石黒浩 大阪大学大学院基礎工学研究科栄誉教授です。人と機械との関係性、そのあり方は大きく変貌を遂げており、精神疾患患者への治療にも応用されてきています。次に、ヒトのAMPA受容体の生体内可視化を世界で初めて実現した横浜市立大学生理学の高橋琢哉教授にシナプス生理学に関する双方向性のトランスレーショナル研究をご講演いただきます。満倉靖恵 慶應義塾大学理工学部教授には、電気生理学的手法、工学的アルゴリズムを用いて、リアルワールドでいながらにして、人のこころの状態を定量評価し、さらに幸福感を高めていくためのリアルタイムセンシング技術についてお話いただきます。

後半では、慶應義塾大学医学部精神・神経科の三村 將教授が、診察場面の短時間の会話をAIで自然言語処理し、認知症の早期診断につなげる技法についてお話しします。最後に、国際電気通信基礎技術研究所（ATR）脳情報通信総合研究所の川人光男所長には、脳回路の微細な変化を捉え、AIを用いてうつ病などの精神疾患の診断に援用していく最先端技術についてご講演いただきます。

脳科学研究の最前線に立ち、こころの問題の解明に取り組むキーパーソンの方たちのお話を通じて、日々進化するこの領域の一端を知っていただく貴重な機会となると考えています。是非、多くの方々にご参加いただき、大きく変わりつつある新時代のこころのあり方を一緒に考えていただければ幸いです。

（三村 將、陣崎雅弘）

三四会会員各位

前三四会会長 比企能樹先生（37回）が10月14日にご逝去されました。享年89歳。2005年から2014年までの9年間三四会会長を務められ、三四会の発展、改革に取り組んで来られました。また、2013年5月から2020年3月まで慶應連合三田会会長を務めてこられました。奇しくも連合三田祭大会が10月16日に開催されており、大会の終了を待って訃報を頂戴いたしました。

故 比企能樹先生の三四会への長年のご尽力に感謝申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

三四会会長　武田純三

鑑定知来

認知症治療がようやく大きな転換期を迎えている。アルツハイマー病に対する根治療法は長らく失敗続きだったが、昨年6月にアミロイドβに対するモノクローナル抗体「アデュカヌマブ」が初めて米国で試験的に承認された。残念ながらその後に十分な有用性が示されず、欧州での承認は見送られ、日本での見通しも立っていない。しかし先月末には当院でも治験実施中の「レカネマブ」臨床第Ⅲ相試験において、かなり良好な結果が発表された。早ければ年内に米国での承認、来年以降には我が国での承認が期待される。

一方で、これら治療薬の対象は発症前～早期アルツハイマー病患者に限られることなどから、臨床現場においては引き続き非薬物療法による介入が欠かせない。非薬物療法の中で発症予防や進展抑制への有効性が確立しているのは運動療法だけである。効果的と考えられている運動負荷は、早歩き程度の有酸素運動、頻度は週に3―4日以上、毎回30―40分程度である。国立長寿健康医療センターでは運動と同時にしりとりなどの認知課題を行う「コグニサイズ」の有用性を提唱している。運動療法はデイケアなどを通じてこれまで広く行われてきたが、コロナ禍で「ステイホーム」が推奨され、まだまだ厳しい環境での実施が続いている。

ソーシャルディスタンス社会の中、ゴルフ人気が高まっている。怠惰な私にとって毎日の散歩を繰り返すことはつらい修行だが、ゴルフボールを打ちながらであれば、早朝からの散歩が至福の時に変わる。しかもただ歩くわけではない。友人と会話をしながら、またスコアや戦略を考えるという認知課題を同時に実施しながら、約10㎞程度を早歩きする。その間、時には集中力や忍耐力も要求される。万が一転倒しても芝生のクッションが助けてくれる。保険適応は難しそうだが、個人的にはぜひおすすめしたい運動療法である。

（精神神経科学教室、メモリークリニック　田渕　肇　73回）